

モンスター生態報告書

18歳未満の購入閲覧ヲ禁ズ

ここに記述する内容は先人の知恵とフィールドワークの成果によるものである。
ハンターを名乗る者達が大自然の中、弱き肉となる姿を幾度も目撃した。
彼らが思うほど自然への介入は容易な事では無い、
ハンターは例外無く自然への理解を深める事に時間を費やすべきだ。
私の書き記す物は自然の驚異のほんの一端だが、
彼らが得がたいであろう知識を中心に記してある。
未来を担う若きハンター達の助けになる事を切に願う。

【海竜ラギアケルス】

強力な放電は電撃を警戒していても脅威である。防具の耐性など気休めにしかない。防具に頼るしかない力不足のハンターは組み敷かれ蹂躞される。失神しても容赦なく流され続ける強大な電撃に、体液をまき散らしながら電撃地獄が終われば意識を取り戻す間もなく、海竜の腹に収まり緩慢に溶かされていくのだ。



【両生種スクーアギル】

獲物を食いちぎり血肉を啜る印象を持ちがちだが、彼らが本当に好むのは獲物を丸ごと飲み込む行為だ。胃袋は非常に特殊で、真空パックのように獲物にピッタリと張り付いて消化する。どういいうわけか獲物は窒息する事なく、胃袋の中で動き続ける。腹を満たすためだけでなく、自らの胃袋の中で獲物が力尽きていく様を感じる事が楽しみでもあるようだ。

幼体ながらも非常に残忍な性格を持つモンスターである。



【桃毛獣ババコンガ】

発情中の桃毛獣は非常に暴猛で見境が無い。
桃色に近い色の防具を纏って近寄るのは危険である、人間の雌を同族と勘違いして性行為に及ぶこともある。
桃毛獣は精液中の精子量が非常に少ない、行為はそれを補うように長時間に及び、数十回の射精行為が行われる。
また、長時間雌を拘束するためか、桃毛獣の精液中には特殊な生理活性物質が含まれ、雌に強力な陶酔感を与える。
もし人間が体内でその物質を吸収してしまったら、快感に耐えられず廃人になる事もある。



【影蜘蛛ネルスキュラ】

強靱な鉄角に仕込まれた毒で獲物の動きを奪う。影蜘蛛の毒は未だ正確には解明されておらず、様々な効果を持つ。だが、注入された人間はいずれの効果を持つ毒であっても性的絶頂に似た恍惚感を得る事が確認されており、闇市場で高額取引されている。そのためギルド非公認のハンターが狩りに出かける事案が後を絶たないが、知識も経験も無い者達は多くの場合捕獲され、恍惚感に抗えず餌として残りの人生を送ることになる。



【甲虫種ランゴスタ】

麻痺毒を持つ小型のモンスター。ターゲットになる事は少なく、無視しがちの存在だが、彼らの麻痺毒は蓄積すると非常に危険な物である。少量なら全身の痺れ程度だが、大量の麻痺毒が体中に回ると肉体の感覚が完全に無くなる。意志とは裏腹に体はビクビクと跳ね回り、危険を察知した脳は大量の脳内麻薬を分泌する。大型モンスターとの交戦中でも、突然狂いそうな程の快感に襲われ、体が動かなくなる。そうなれば後はされるがままに肉体を差し出すしかない。



【灯魚竜チヤナガブル】

擬態し獲物を捕らえるモンスターだが、知識を持ったハンターなら見分ける事は容易だ。むしろ「灯魚竜程度なら」と慢心したハンターが擬態を見誤るケースが多い。灯魚竜の捕食は獲物を丸呑みにするが、口内から胃袋までの臓器の表面は特殊な粘液で覆われており、これが獲物の体に塗られる事で獲物の肉体は弛緩し、無抵抗のまま消化する事が出来る。一説ではこの粘液は筋肉を弛緩させるものではなく、獲物の脳に働きかけ、抵抗を奪う物だと言われている。獲物は何らかの快感を感じており、消化されていく事に悦びを感じているのだと。正確な情報はまだ無い。



発行 YokohamaJunky

発行者 魔狩十織

発行日 2016.8.14

印刷 ねこのしっぽ

web <http://yokohamajunky.com/>

email mail@yokohamajunky.com



Yokohama Junky